

関藤藤陰の青年時代
を描く

せきとうとういん

関藤藤陰 (文化4年(1807)～明治9年(1876))

その頃藤陰自身は「茅原瓜田備中笠岡八景」という詩を書いている。「茅原の瓜」は、彼の尊羹

ろかい
鱸膾であった。故郷の美味を思い出して郷愁をかき立てられ、名利を棄てて帰郷してしまったという

中国故事のように、藤陰の理想も、政治舞台での立身出世などではなかった。孤児であった彼が、周

困から押し出されて、ついに藩政の頂点まで登り詰めながら、彼が常に願っていたのは早く郷里に隠

遁して詩文に親しみ、名物の甘い瓜を貪ることであった。

じゅんこう

江戸時代末期の儒学者にして政治家。小田郡吉浜村（現・吉浜）で、
神官をしていた関藤政信まさのぶの四男として生まれた。関政方せきまさみち（関鳧翁）の弟
にあたる。笠岡の敬業館で小寺氏から学問を学び、その後京都で頼山陽せきふおう
の弟子となる。

天保13年（1842）、儒学者として福山藩主の阿部正弘に召し抱え
られた。安政3年（1856）、藩主正弘の命を受けて蝦夷（現：北海
道）・樺太（現：サハリン）・エトロフ島（千島列島の島）を探検し、
『観国録』（公的な調査報告書）、『蝦夷紀行』（紀行文）を著す。

慶応4年（1868）、鳥羽・伏見の戦いがあり、長州藩の藩兵が東へ
向かう途中に、福山城を包囲した。藤陰は藩の重臣とともに長州方と話
し合いをし、戦いをやめることに成功して、福山の藩と城下町を危機か
ら救った。この時62歳だった藤陰は、老臣として藩の政治をリード
し、死を覚悟して事に当たったといわれている。

明治4年（1871）、「廃藩置県」により、もとの藩主の阿部正桓が
華族になって東京へ移住することになり、藤陰は頼まれて家政の仕事に
当たった。当時、東京で役人をしていた元興讓館初代館長の阪谷朗廬まさたけ
との深い交友関係が続いていた。明治9年（1876）、70歳でなくなり、
東京谷中霊園に葬られた。

昭和51年、藤陰の没後100周年を記念して、福山市民有志によって
「藤陰関藤先生碑」が、福山市立大学附属こども園の一角に残ってい
る。文章は阪谷朗廬が作っていたものである。

『笠岡ふるさとガイド』 笠岡市より



笠岡 敬業館跡